

これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査

—2009年版レポートより

山下 満智子

Written by Machiko Yamashita

食分野調査概観

食生活全般への満足感は相変わらず高い水準で推移しているが、食生活の不満は「栄養バランス」から「食の安全・安心」へと大きくシフトした。中国産冷凍餃子への毒物混入や相変わらず続く食品偽装、事故米転売の発覚など食の安全・安心を揺るがす事件が相次いだことが大きな要因となった。

戦後の欠乏期を経て、経済成長とともに日本の食料事情は改善され、1980年代以降飽食の時代などといわれるほどの状況となった。それ以来30年近くの間、常に健康や栄養バランスが食生活の不満のトップとして挙げられてきた。しかし今後、世界的な食料の逼迫が予想され、輸入に依存する日本の食卓の危うさを誰もが意識するようになってきた。そして自身の食卓を振り返れば、調理が嫌い・面倒と感じながら、短い調理時間で手早く食事を済ますためには、中国産や近隣諸国で加工された冷凍食品や冷凍野菜が不可欠となっている。外食や中食も状況は変わらない。食生活の不満の転換は、「食の安全・安心への不安」という食環境の大きな変化を象徴するものといえる。

食生活に関する調査分析

■主な傾向

(1) 「栄養バランス」から「食の安全・安心」へ、食生活の不満が大きくシフト。

(2) 一方食生活への満足度は、75・5%から78・6%へと若干ではあるが上昇。

(3) 平日夕食の調理時間の主流は、30分〜40分が定着。休日夕食調理時間の主流も30分〜40分。調理時間の短縮化傾向が引き続き見られる。

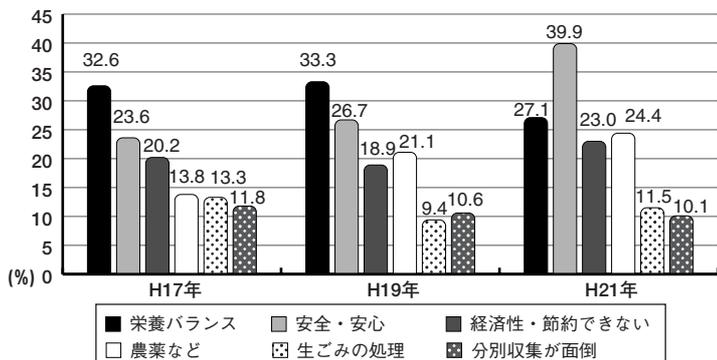
(4) 調理・片付けが増加した60代、50代男性で、調理好きを嫌いが逆転、面倒感も増す。

食生活で不満な点

平成21年調査では、食生活で不満な点として「安全・安心」39・9%、次いで「栄養バランス」27・1%、「農業など」24・4%、「経済性・節約できない」23・0%の順となった。

平成17年・19年調査では、「栄養バランス」についての不満が一番多かったが、本調査では、「安全・安心」が著しく増加し逆転、「農業など」についても増加傾向にある(図1)。近年の食の安全・安心を揺

図1 食生活で不満な点



るがす事件について振り返ってみると、平成12(2000)年6月の雪印集団食中毒事件、平成13(2001)年9月の日本でのBSE(牛海綿状脳症)の発生、それに関連した一連の牛肉偽装事件、平成14(2002)年3月の中国冷凍野菜農薬残留問題と続き、食の安全・安心は社会問題となった。そして平成15(2003)年の食品安全基本法の制定、食品衛生法の大改正へとつながった。

しかし、その後も産地偽装事件は後を絶たず平成16(2004)年の魚沼産コシヒカリ偽装表示事件、平成17(2005)年の中国産や北朝鮮産アサリの国内産表示事件、平成19(2007)年には、船場吉兆の賞味期限改ざんや偽装事件、食べ残しの使いまわし、比内鶏偽装事件などが大きな社会問題となった。

平成20(2008)年には、1月に中国産冷凍餃子による大きな事件が発生した。大手企業や生協ブランドの加工食品にも拘わらず、原因や混入経路がなかなか解明されず、一時は日中間の国際問題化が懸念される事態にまで発展した。中国の生産現場で意図的に入れられた可能性が極めて高いと指摘されながら、現在も全面解決にはいたっていない。輸入食品の問題解明の困難さがあらためて浮き彫りにされた事件であった。また同年7月には中国産うなぎによる大規模な産地偽装事件が発覚、9月にはミニマムアクセスで輸入が義務づけられた外国産米の事故米転売事件が発覚した。平成20年も身近な「食の安全・安心」が大きく揺らぎ、平成15年の食品安全基本法の制定や食品衛生法の大改正の効果を生活レベルではまったく実

感できない1年であった。

本調査は、平成21年1〜2月に実施し、中国産冷凍餃子事件や事故米、中国産うなぎの偽装など記憶に新しく、それでも輸入食品、特に中国や近隣諸国からの輸入なしに成り立たない日本の食生活を目の当たりにして、食生活の不満が「栄養バランス」から「食の安全・安心」へと大きくシフトしたと考えられる。

食生活全般への満足度

食生活全般への満足度は、78・6%と平成17年調査75・5%に比べ、満足割合が

若干ではあるが増加している。また平成17年調査に比べ、やや不満・不満の割合は、5%強とあまり変化はなく、やや満足(39・7%↓45・2%)が増加している(表1)。

食生活全般への満足度は、平成17年調査以来75・5%→78・6%で推移しており、生活全般の満足69・2%に比べ、食生活への満足度はやや高い水準にある。

夕食のための調理時間

■全体

平日夕食の調理時間は30分以上→40分未満28・1%、次いで50分以上→60分未満21・9%、40分以

表1 食生活全般への満足度(%)

	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満	満足(計)	不満(計)
H17年	35.8	39.7	18.8	4.4	1.1	75.5	5.5
H19年	38.6	39.7	16.1	4.6	0.8	78.3	5.3
H21年	33.4	45.2	15.7	4.7	0.8	78.6	5.5

上→50分未満18・1%、20分以上→30分未満14・2%、60分以上11・0%の順であった。平成17年調査以来、平日夕食の調理時間の主流は、30分以上→40分未満であったが、その割合が増加(22・8%→27・0%↓28・1%)し、調理時間の短縮化傾向が相変わらず見られる(図2)。しかし、一方で30分未満の調理時間の割合は、平成17年調査に比べ、減少(24・1%↓18・7%)して

休日夕食の調理時間は、平成17年調査では50分以上→60分未満が22・8%、平成19年調査では、同23・3%と50分以上→60分未満の割合が僅差ではあるが一番多くなる傾向が見られた。平成21年調査でも、平日に比べ休日の調理時間が長くなる傾向は見られたが、休日の主流の調理時間は、平成17年調査に比べ短くなり、30分以上

図2 平日夕食の調理時間

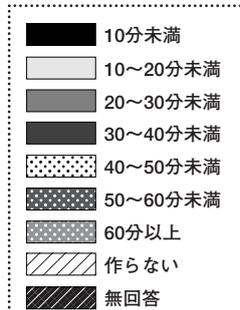
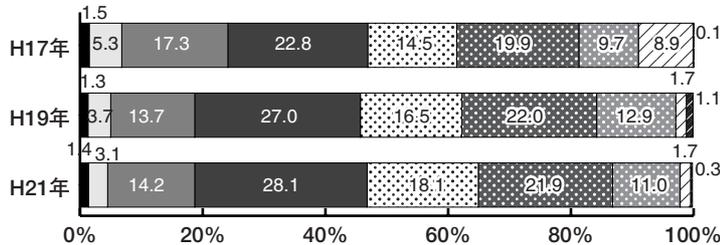


図3 休日夕食の調理時間

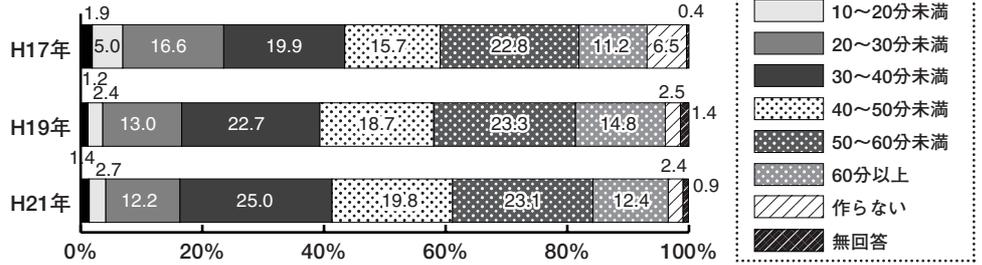


図4 30代女性平日夕食調理時間

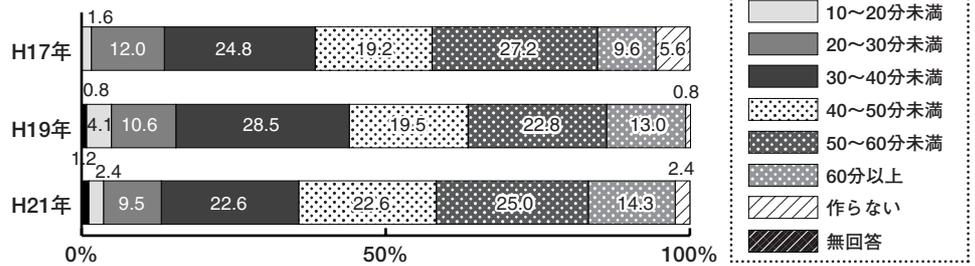
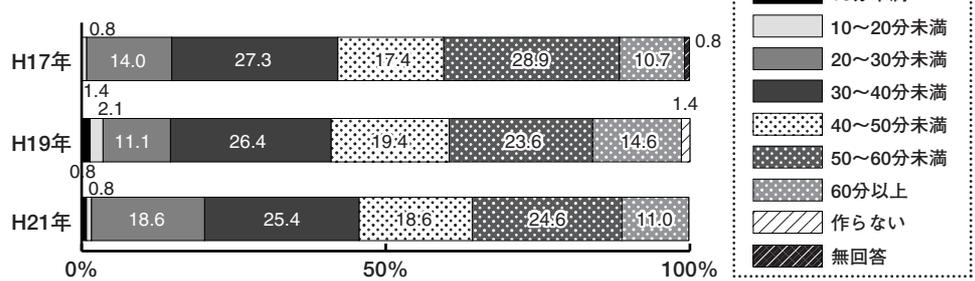


図5 40代女性平日夕食調理時間



主に調理をする30代以上の女性の平日調理時間では、30代女性の平日の調理時間は、50分以上、60分未満が25・0%、次いで40分以上、

女性年代別の平日調理時間

40分未満25・0%で、主流の夕食調理時間は、平日・休日ともに30分以上、40分未満となった。

50分未満22・6%、同じく30分以上、40分未満22・6%となった(図4)。40代女性では、30分以上、40分未満が25・4%、50分以上、60分未満24・6%とわずかであるが30分以上、40分未満の割合が多くなった。また、30代・40代女性では、平成17年調査にお

図6 50代女性平日夕食調理時間

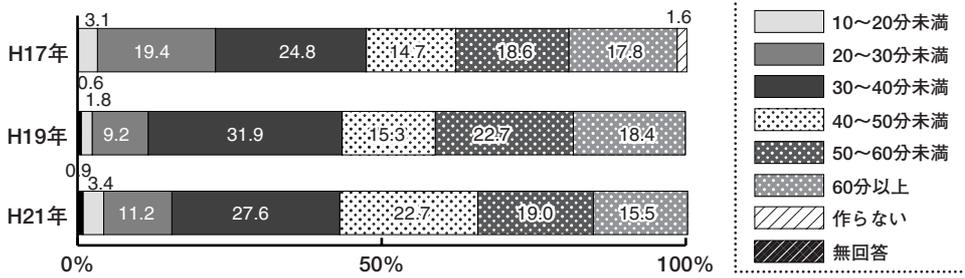
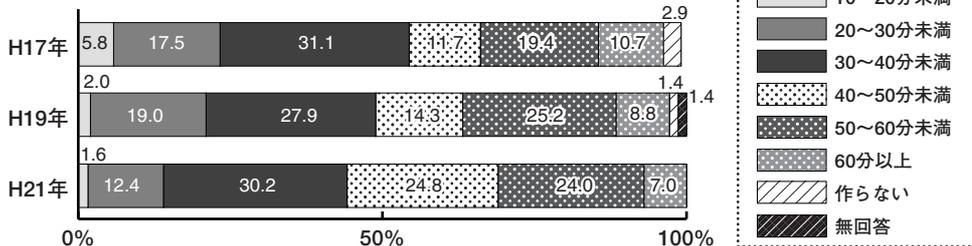


図7 60代女性平日夕食調理時間



いて見られた調理時間の二極化傾向が本調査でも見られた。50代・60代女性では調理時間30分以上、40分未満への割合がさらに多くなり、60代女性の3割で調理時間が30分以上、40分未満となった(図6・図7)。しかし60代女性で一概に調理時間が短いわけではなく、40分以上、50分未満24・8%、50分以上、60分未満24・0

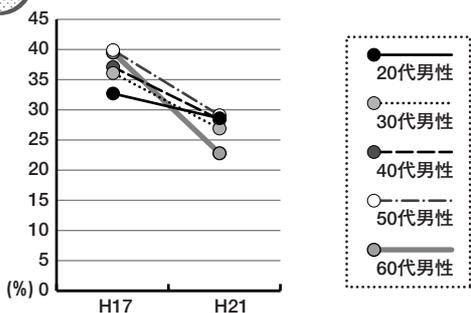
表2 男性の調理頻度 調理をしたことがない割合 (%)

	20代	30代	40代	50代	60代
H17年	4.1	5.6	1.9	13.9	7.3
H19年	0	6.7	4.4	10.6	10.4
H21年	0	3.8	2.3	7.5	7.6

表3 男性の調理頻度 調理をしない割合 (%)

	20代	30代	40代	50代	60代
H17年	36.7	50.0	54.3	41.7	50.5
H19年	38.2	44.4	38.6	36.4	38.2
H21年	42.9	48.1	37.5	44.1	37.9

図8 片付けしない・したことがない



調理の面倒感は、平成17年調査では30代女性50・4%、20代男性41・4%、40代女性38・0%の順に高く、40代男性17・4%、60代男性22・2%、50代男性22・9%の順に低かった。平成21年調査では、60代男性52・3%、50代男性51・6%、20代男性50・0

調理の面倒感

逆転した(表4)。

男性の片付け

片付けをしない・したことがない男性の割合は、男性の全世代で減少した。60代男性で片付

男性の調理をしない割合は、20代で平成17年調査36・7%から平成21年42・9%と増加が見られ、20代・50代男性で調理をしない割合が多くなった。一方、40代で調理をしない割合は54・3%が37・5%、60代で50・5%が37・9%と調理をしない割合が大幅に減少した(表3)。

調理の好き嫌い

男性の調理の好き嫌い

平成21年調査では、20代男性で調理が好き57・1%、嫌い14・3%と、平成17年調査に比べ、好き・嫌いともに増加した。20代以外の男性では、平成17年調査に比べ、好きが大幅に減少し嫌いが増加している。特に60代男性の調理が好き24・2%、嫌い33・3%、50代男性の調理が好き28・0%、嫌いが29・0%と、調理好きを嫌いが

けをしない・したことがない割合は、39・5%から22・8%に減少、次いで50代男性39・9%から29・1%、30代男性36・1%から26・9%、40代男性37・1%から28・4%、20代男性32・7%から28・6%の順に減少している(図8)。

表4 男性年代別調理の好き・嫌い (%)

	20代		30代		40代		50代		60代	
	好き	嫌い								
H17年	48.3	6.9	52.1	14.6	58.7	2.2	54.2	8.3	42.2	8.9
H19年	52.9	17.6	34.4	28.9	30.7	19.3	30.3	28.0	28.5	22.2
H21年	57.1	14.3	32.7	23.1	39.8	20.5	28.0	29.0	24.2	33.3

図10 女性の面倒感経年変化

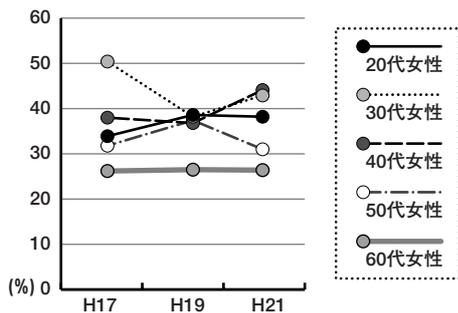
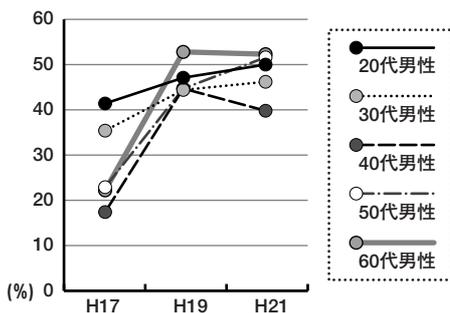


図9 男性の面倒感経年変化



の順に面倒感が高く、60代女性26・4%、50代女性31・0%の順に低い。平成17年調査に比べて平成21年調査では、男性の全世代で調理の面倒感が高くなった(図9)。60代女性で平成17年調査以来26・2%、26・5%、26・4%と男性や他の世代に比べて面倒感が低い(図10)。

(大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所副主任研究員)

CEL